

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	雑報
Author(s)	
Citation	龍南會雜誌, 80: 97-126
Issue date	1900-06-25
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5597">http://hdl.handle.net/2298/5597</a>
Right	

## 雜 報

### ○學寮茶話會

本學年も今一ヶ月ばかりにして了らひとす。乃ち五月廿七日例に於りて學寮茶話會を瑞邦館に行ふ。午后七時開會、菊池學寮會長まづ立ちて一場の演説を試む。其大意に曰く『學寮は一大なる家族なり、寮生互に家族的親睦を以て相交り相和するは、以て學寮の美を發揮する所以にして、また學寮の利益を享受する道なりとす。然るに現時我寮の有様は如何、敢て南寮北寮といはず、單に室を別にするのみにして已に他人の如き疎濶あるを見るは、是れ最も悲むべき現象にあらざるや。抑も現今の學寮には積極的と消極的とのラアンクシヨンあり。混濁せる社會より遠かりて高尚無垢なる學生の品格を保全する是れ消極的にして、全學校の中堅となり精粹となり、以て尊敬すべき校風を作出す、是れ積極的なり。思ふに此二大職責を完うせんとするに、是非とも寮生的一致結合もなかるべからず。

而も我寮の現狀既述の如しとすれば、諸君は何を以て能く我寮の美を成し、我寮の體面を保たむとするか。吾人寧ろ慨きて嘆せざる可らず。願くば考へ考更に奮起する處あれ』と。次に奧舎監起ちて壇に上らる。徐ろに告げて曰く『余は先きに第二學期の第一回學寮會にて一度余の理想を述べ置きたり。此所に出席せらるゝ諸君のうち一部の人既に知承せられ居るとなりと信すれども、全寮生諸君が一堂の下にかく會合せられたるは、余が就職以來初めてのことなれば、此に改めて余の所信を公開せんとす。思ふに寄宿舎制度は之を以て距離の近き下宿屋に充てんとするものにあらざるや又舎生を一意或規則の下に束縛せんとするものにあらざるや、即ち之を教育上の家となさむとするものにあらざるや、之によりて學校教育の不足を補はむとするものにあらざるや蓋し點取主義の學校、時間を惜む學校にては到底完全なる教育を行ふ能はざればなり。實に余が此學寮に入りたるも畢竟は此特別なる教育に任せむと欲したればのみ。唯だ身不肖力足らず、事業所志と違ふとは多からむも、衷心の本願は

即ちこゝに存すと謂はざる可らず。抑も教育の本意は吾人をして身体精神の完全なる發達をなさしめ、依て以て吾人自身及び吾人の同胞の無限の發達に貢獻せしめむと欲するものなり。而かも此等の眞意義は今明かに實行されつゝありや。當局者をまて『學生風氣取締問題』などを八釜敷いはするは果して何等の現象ぞ。德育が一般學生に缺乏せるは明かなる事實、寄宿舎は此點に關えて甚だ必要なるものなり。想ふに現今社會の狀態及び教育制度の上より見て、寄宿舎なければ到底完全なる德育は望まれざるべし而して同じく此寄宿舎の制度にても例へば何々は爲す可らずといふが如き所謂形式的規則は余敢て其制定を望まざるなり。寮生一般をまて道義の感念を内心に感んならしめ、精神的に根本的に學生の道徳を進ましむるは德育上に建てる寄宿舎制度の最も貴ぶべき要件なりと思意す所謂内を脩めずして外面の枝葉のみを改めむとするは最も拙なる策なればなり。此故に寄宿舎は道義的の遊戲をつとむるところ、道義的の習慣道義的の觀念を養成する所たらざる可らず。

文明いかに進歩するも、富いかに増進するも、人心の道義にまて確立せざれば國家の根底は意外に薄弱なりと知るべし。次に体育のとなるが、最近の統計は學生の体格は俳優と藝人との中間にあるを報せり、是れ豈大に悲むべき現象にあらずや。寄宿舎は實に唯これのみの故を以ても既に建てざる可らざる運命を有す。体育にして充分ならざれば智育の進歩も大に危しと謂ふべし。現時我學寮の運動場を一瞥するに、二三百もある寮生のうち運動場にある者常に二三十を超えず。由來強健を以て名ある我九州の地にまて斯の如き所見は決えて好もしきものにあらざるなり。諸君は自ら先づ三省せざる可らず。此健全なる寮風を挽回するは即ち諸君と余等との一大責任とす。次に現今の學校教育にて最も誇り居る智育はいかん、今の生徒と稱する者教科書以外果して何等の智識あるか。教育は唯だ漫りに書物を讀むとにあらす。吾人を以て直接に實世間に觸れ又宇宙の眞理に觸れしめむとするもの即ち教育の眞本領なり思ふに寄宿舎に於て所謂ヒューマン、ライフにタッチするは實に

此智識の増進を補益せしむる所以の道にあらざるや。種々なる意見を持つる人、種々なる趣味を有する人が相集りて談話するは、實に人生の興味を覺る機會にしてまた學生の利益を受くる好機會とす。故に余は諸君に各室茶話會及び學寮茶話會等に於て、常に出來得るだけ多く交互の思想を交換せんとを望まざるを得ず。稱して茶話會といふも必ずしも茶を啜り菓子を喫するにとあらざるは諸君の能く知承せる所なるべし。最後に余の遺憾とするとは今日の教育が智識に就て専ら受動的にまて活動的にあらざると是なり。學生にまて試験の時のみ活動するが如きは最も悲むべき現象なり。諸君願くば常に大に其思想を鍛練せよ。殊に雜誌上演說會等に諸君特有の思想を吐露して相互に研究するが如きは最も有功有益なるとなりと思ふ。之を要するに今日の寄宿舎なるものは今日の學校制度の不完全不充分を補ふ處に外ならず。諸君希くば之を銘心せよ。勿論余の希望は甚だ大なりと雖も。進まざれば達せず、進んで已まざれば必ず達するの期あるべし。眞に教育を以て自ら任ずるの人

は、當に這般の思考を抱懷しつゝあるべき筈なり」と滔々數千言意氣甚だ昂れるを見ぬ。吾人は先生に向ひて實に此演說のうちに大に傾聽せざる可らざるもの甚だ多かりしを謝せざる可らず。時に八時十五分、是より菓子の分配あり。文科三年の三澤糾君又起ちて述べて曰く「人は其心の裏に一の確固たる元動力無るべからず。理想の現實さるゝも之れが爲なり。高尚なる寮風の起るも亦これが爲のみ。而て此元動力を確定せんとするには自らの修養大に必要なり。かくの如くならば我寮といはす室といはす個人とまて諸君が自ら盡すの念大に盛ならむ。また範圍の如何によらず場所の如何によらず、苟も中以上立たむと欲する者は常に此事を注意せ居らざる可らず。曰く我一言一行は多少に拘はらず常に他に影響する所ありと、故に斯の如き人は終始其一言一行に充分の責任を持たれむとを望む」と最後には島野舎監出で、一場の諷刺演說をせらる。想ふに當時唯だ笑ひて其諷刺の快妙を嘆賞せし者果して能く其眞意を解し得たるや否や解し得て而して其言に孤負せざるの決心

と赤誠とあるや否や。右了くて例の如く餘興としも狂言數番あり満したる者は或はラム手を取り前きの菓子にてなは腹の蟲を制し得ざる者は或は更に又菓子を獲得各自十二分に歡を盡して十二時頃全く閉會したり。

### ○短艇部 大會

書津湖畔花落ち綠陰正に濃かなり。四月十六日晴快を下し春期大會を行ふ。薰風落英を吹き濛々たる書湖の面、鴛鳥悠々として浮ぶ所、何事ぞ、數十の小艇湖上に動き、數百の紅裙長汀に集る。見よ、楊柳水依依たるほとり、一双の魚影晴明を弄するにあらずや。

カッター大連は風流嶋の東、龜洲の附邊に投錨して審判船に充てられ、滿艇飾を施きて無數の小旗艇頭に翻る。競争は十一時半に始り、五時半に終る。回數凡て十五回杉山教授審判長たり。武藤、藤本、大森の諸教授顧問の勞を執られたり。雜報子亦筆をとつて、大連舟中にあり今その梗概を記せんか、(以下部員授)

《第一回》發艇先づ可なり、漕調は混成競漕のことゝて充分と云ふを得されども、比較的揃

みじ方なり。回航は青最も早く、勝利は青に歸す。四分卅四秒

《第二回》混成競漕なれども、各組撰手諸氏の乗組なれば橈に力入り、漕調亦佳なり。回航は赤少しく早く、他は殆んど同時なり。石垣前にて紫のへびー最もよくさゝたれども、赤亦必死となりてあせりたれば勝利は終に赤の得る處となれり。四分廿四秒半

《第三回》本校老練の漕手乗組めるととて、漕法よく又舵手の動作よく、當日混合競漕中、第一の見物なりき。回航は青最も優れ、紫最拙。石垣前にて殆んど同時にへびーをかけたれども及ばず。青二艇身の差を以て先着、四分二十秒半。

《第四回》回艇の際青は非常に早く、己に他艇を凌ぐ二艇身強。回航后益々差を生じ、遂に四五艇身の差にて青。勝利となり、白と赤とは白少しく早かりき。四分五十二秒二分ノ一。

《第五回》回航點にては白やく早く、青これに次ぐ。回航后は、青漸次白を凌ぎ、各艇二艇身位の差にて赤白紫の順にて決勝線に入れり

四分四十五秒半。

《第六回》 職員競漕は、昨年は半航路なりしも、本年は他の競漕と同航路にて行はれたり。回航は白赤殆ど同時なりしも、青は力の平均を得ざりし爲めか。數艇身後れたり回航后白は益勢を得、一艇身程にて勝利。六分。

《第七回》 來賓競漕の筈なりしも、人員揃はざりしを以て、本校學生の混合競漕を行ふ。回航は紫早く、白之れに次ぐ。回艇后白は赤紫の航路を奪ひ、勝利は白の手中に落ちぬ。此競漕は、紫の漕手弱きにあらざれども、舵手の經驗足らざる爲め、敗を取りしものと思はる。白の航路を奪ひしとき、之れを避けずして直進したらんには、白は已れの航路にあらざれば、航路をゆつり大に不利を來すべきなりしならん。四分四十八秒半。

《第八回》 白と紫は殆んど並進せしも、回航后紫の勢力強く、三艇身の差にて紫の勝利。四分四十秒。

《第九回》 青は回航最早く、赤勢力ありしも、遂に勝は青に歸したり。紫最もをくる。四分

四十九秒。

《第十回》 發艇は青やゝ後る。回航は白最早く、赤之れにつぐ。石垣前にては三艇殆んど並ひたる如し、半身艇程の差にて白の勝。四分五十九秒。

《第十一回》 初め紫より、回航は赤早く、石垣前より白進み、一艇身程の差にて白の勝利。

《第十二回》 回航は紫先づ回り、赤次ぐ。白は漕調不揃の爲め、中途にて一時休止またり。

二艇身の差にて紫の勝利、四分四十二秒。

《第十三回》 回艇は殆んど同時、赤と紫やゝ景氣よかりき。各艇半艇身の差にて、紫赤白の順にて決勝線に入れり。

《第二撰手競漕》 四艇揃ひて發艇線を離る。回航紫最早く、青赤之れに次ぐ。回航后青は次第に紫を凌ぎ、石垣前にて半艇身程ぬき一艇身半の先着をなしたり。紫赤共にヘビーは可なりきゝたれども、やゝ勞れたる如く見受られたり。白は回航后より次第に後れ、第四着となりたり。要するに、白は漕法劣れりと云ふにあらざれども、全く練習の足らざる爲め、

半途にえて大に疲勞の狀を現し、漸々後れたるなり。而れども漕手責任を重んじ大に奮勵せられたるは、衆の認むる所なり四分二十六秒四分の二

撰手諸君は左の如え。

船手

整調

第三番

二番

艇船

工學部白三本 繁 川端八郎 松下三郎 末次精一 岩 永 慶

第一部紫加藤守一 津守觀三 赤木歌吉 古賀傳吉菊池剛太郎

第二部赤永村 清 矢野 漸 和田養春池上兎喜衛 西村事代

第三部青副島謙四郎 岩崎文治 三原新太郎 藤崎喜助 阿部賢作

(第一撰手競漕) 發艇には甲乙なく、並び進め

り。回航にかゝりしは、白最も早く、紫之れ

に次ぎたれども、回航を終りしは同時なりき。

白の回航は度を過えて航路を離れたる爲め、

比較的時間を要したり。紫の回航は舵手の熟

練と整調の機よくさゝたると相待て、最も巧

になされたり。回航紫白をぬくこと半艇身強、

紫先へビーを命ず、白次で命ず。白強漕よく

効を奏し、約一艇身弱の差を以て先着す。紫

のへビーを命じたるは時を得、整調を非常に

勉めたれども、練習の不充分なりしにや、へ

ビー少しもさかず、勝を白にゆづりたるは殘

念なり。白は漕手の非常なる練習の爲め。猶餘力ありたる如く見受けられたり。青と紫と約半艇身弱の差、赤は又此れより後るゝと半艇身。青の昨年に比して技の劣りたるは、練習の足らざりしにや。

撰手諸氏左の如し

船手

整調

第三番

二番

艇船

工學部白池神重政 彼未利平 有光兎茂喜 下川修造 西門善三郎

第一部紫神田城太郎 戸次正 福原 清吉 鷲尾健治 岡 今朝雄

第二部赤本山久壽頼 中島欽一 古閑正雄 久家平三郎 平田全祐

第三部青富田定壽 氏原均一 梶谷鐵ノ助 長尾正保 澤村 榮美

附記 本會記事は前號に編入の都合なりしも、誤りて稿

を失し、延引今日に至れり。幸に諸君の宥恕をこ

ふ。

## ○弓術部春季大會 (部員投)

四月十三日、今日は春季大會のあるべき日となりぬ。昨日のあめの名殘の雲猶はれやらねど、今日の催しにかなかくによき天氣なり。式は運動場にて開かれぬ。集まる人々には、東師範大平部長、園先生、餘田先生、島野先生、戸張先生、能勢先生、堀先生、内藤、今井、平田、磯、常吉、野村、土屋、鶴見、矢野、鴻巣、澤、

大谷、一階堂、飯田、山元、太田、永山の諸氏  
合せて二十有四人、孰れも斯道にかけては熱心  
の士にして、我こそは今日の大功名者よと口に  
は云はねど、中はそれと面にもあらはれたり。』  
先づ遠矢よりはしまりぬ。的はかゝりぬ、遠さは  
三十三間とぞいふなる。そよ／＼と吹く朝風  
をうけて折々小動きする様は、我等が射らむこ  
とをまづものゝ如し。先づ總勢を三組に分つ、  
矢数は六本つゝ三立なり。一組より一立つゝ順  
次に射りはしめて、甲立ち乙かゝり互にあらん  
かぎりの技をつくして競ふ様は、實に勇まゑ  
く見えにけり。始めは前に落ちたればとて心す  
れば、次は上をこし高さのよきは前に出で、後  
になり、當るはいと少し。正午をすぐる頃、や  
う／＼にして射了りぬ。其結果は左の如し。

戸張先生(五本) 園先生(一本)  
大平先生(三本) 堀先生(一本)  
磯 氏(三本) 内藤氏(一本)  
澤 氏(三本) 今井氏(一本)  
島野先生(二本) 大谷氏(一本)  
矢野氏(二本) 飯田氏(一本)

鴻巣氏(二本)  
湯本氏(二本)

二階堂氏(一本)

之にて遠矢もすみて、扇的にうつる。青々たる  
若草のうへに高くかゝげられたる日の丸の扇は  
そのむかし屋島浦の有様も思ひ出てられ、さし  
招く上鵲の姿こそなけれ。皆々吾さきに射貫か  
ひものどひしめく。やがて代矢はふられぬ。第  
一にすゝみし永山氏斯道に入りてより、日猶深  
からずと雖、誠心こめて引絞りたる有様は、あ  
なざり難くぞ見えにける。狙定めて放つ矢は、命  
中したりと思ひの外少しくされて、前をかすめ  
ぬ。次に進める澤鶴見の面々、我こそはと心を  
こめて放てども、今迄遠矢の引くせつきし悲し  
さには、いづれも上矢のみ出てぬ。つゞいて射  
り給ひし東師範大平先生、戸張先生など斯道の  
奥儀を極められし人々なれば、流石に近矢は出  
てまかど、扇は依然として、折まも晴ゆく雲間  
よりあらはれ出てま日の光に、いよ／＼紅の色は  
えて、睨むが如く立ちたりけり。先程より此様  
を見てありし能勢先生十一番目に立出で給ひ、  
云ひ甲斐なき人々の振舞かな。昔那須與一宗高



か青海原の只中に波のまに／＼ゆられゆらるゝ扇さへ只一矢にて射あてたりけり。我久々く此技を捨てたりと雖、日頃鍊ひし此腕はこれしきのことなすに。あまりあり。いぎ我業の程をみよと、矢つかひてふんばり給ひし有様は、實にゆゑくぞ見えにける。やがて心の中に弓矢八幡を祈り給ひ、まづ／＼と引絞り狙定めてひようど放ては、あやまたず日の丸よけて少しく後をぞ射ぬきたる。居ならふ面々誰彼となく射たりや射たりやと、ひたすら歎賞するばかりなり。能勢先生跳りあがり給ひて、あなうれしと唯一聲叫ばれしは、其中に如何なる喜びやこもるらむ。皆々此有様にぞつと笑へば、折からふさくる風にあたりの松さへ聲たてゝ、これに和するかと思はれたり。早矢丈はとあとの人々さしかへて、射たりまも當らずまてやみぬ。

これより運動場南側なる職員射場にて、一寸八分金酌の競射を行ふ。代矢もふられて一番に立ちたる湯本氏、物静かに引絞りて放ちしも。なか／＼當らむともせざりけり。次に立ちたる今井氏、島野先生、大平先生、平田氏、矢野氏、

園先生、内藤氏、土屋氏、いづれも我校名うての名士にまて、其名聞えしつはものなれども、如何またりけむ、今日は近矢も出てざりけり。十六番目に立ちたる鴻巣氏しづ／＼と矢つかひて、我是道に入りて日淺まど雖、然も熱心を以て勉勵せまことは決えて人後に落ちざるつもりなり。然るにさきには遠的に當ること僅かに二本、扇的も亦むざ／＼と人手に渡まぬ。いかで此れなりとも、射止めては、八幡の神に對まても申譯なまど、弓を満月の如く引絞り、竜の目の如く輝ける金的を狙さだめて、こゝどと切て放ては、あやまたず臺との音と共に真中を射貫さぬ。皆々此手ぎはにはひたすら感じあひて、褒むる聲まばしはなりもやまざりけり。之より八寸的三立の競射をなす。當りの多かりしは、園先生、堀先生、東師範、杉山先生、平田氏などなりけり。是にて今日の式も終り、賞品の授與あり。鴻巣氏金の賞與は、先づ拍手の中に與へられ、次は遠的八寸的の賞與を園引にて與へられぬ。マツチ鉛筆烟草などを得て喜ふもあれば、土瓶敷瀝團扇カンテラなどを得て。顔を

まかめるもあり。中にも澤氏の菅笠ど、鴻巣氏の箒どは、殊に人々の顔をときぬ。かくて霏々たる和氣の中に、絃を収めて散會す。時に夕日は西に春かむどまて大空を色彩り、竜田山は霧の中に沈みて、紫の色うるはしく、折々蟬やもとむらむあたりの松にさえずりかはす雀の聲も我部の千代やよばふらむと、いどたのもまぐ聞えけり。

### ○弓術部射納式概況（部員投）

五月二十八日、三年生諸兄の送別を兼ねて、本年の射納式を行ふた。會するもの、生駒、東兩師範を初め、大平部長、園、緒方、堀、余田の諸先生より内藤、今井の前委員、次いでは、委員の稻川、其他野村、平田の手さゝもの都合二十有一人。

やがて矢附けの四五本切つて放つ程に、彼是三時にさま迫つたので。さらばと愈射納の射初めに取り掛つた。初めが例の金的競射。此日は朝より天も曇つて殊にあづちは黒し。的は少さいながらもきら／＼と輝いて、假令は暗夜の航海者が遠く燈臺を望むが如く、又は夜間眞の暗に

爛々たる黒猫の目を見るが如く、頗るあざやかに殊に射よげに見えた。第一に現はれ出でたは薩摩の少年山本喜二氏満身の力を下腹に集めて切つて放つた矢は的の狙はづれて少しく後上に立つた、夫れより堀先生、生駒師範と順次に二十一人が射つては退き、立つては射。最後に大平部長が、只これしきの的何のものかは、方々はなぞて御遠慮めさるゝぞ某こそは左手に弓は持たずとも右手の押手にくるいはなし。さらば御免と云はぬ許りの御氣色。よつ引いてひやうど放ちし矢は壺と聲すると思ひの外、如何なる所にくるいやありけん、押手が勝手か、乃至は狙いか、後ろの下に的をたゝいて、あづちにぐざど立つたは殘念であつた。かくて早矢は無難に終りて、乙矢となつたが、此立も的に近づきて人々の膽を冷やしアツと覺えず叫ばしむる程の矢もなかつた。

折から、松の枝を渡る風の音さら／＼と何となく打ち濕みて聞ゆるので、怪しやどふり放け見れば一天俄にかき曇り、一陣の風と共に早くも落ち来る粒ら雨の一滴二滴、それと云ふ内に篠

を亂しての大夕立となつた。三年生諸兄の送別射とて是が所謂涙雨とでも云ふのであらう。夫れより二立目の早矢となつたが、暗さはくらし、雨はふる、射場は破損し、屋根はもる。一時は随分のさわぎであつたが、流石は事に處えてビクとも動せぬ、我部員、ひるます、撓ます、躊躇らはす。狙ひすましたる矢は高く飛ばず、低く落ちず。的の四圍を前後上下に、雨を衝いて飛び行く様はさながら縁なす垂柳の下を乙鳥の飛びかうがやう。桶狭間の合戦も斯くやと許り忍ばれたのであつた。さる程に七番目に立ち給ひしは余田先生、我こそは今を斯くも兩頬に美髯は貯はえたれ、其昔しは那須の宗高にも劣りはせじ、二立目迄は遠慮もせしが、何條たまらん、最早や御免と云はぬ許りの御出で立ち、朱塗りの弓の真中とつて、引き絞たる矢を切つて放てば誤たず、一寸八分の龍眼の真中、ひようと許りに射ぬかれた。矢取りは『當り』の聲高く、此方は一時にヤンヤと許り拍手喝采の音暫くは止まなかつた。

天も此弓勢に御感應せしませまにや、雨も程な

く小やみになりて、夫れより七寸的の分附競射を行ふた。金的に後れを取りし面々は、此の度こそはと狙定めて放つ矢の、此日は如何なる惡日にてやありけん、日頃に比して當り矢少なく矢取りの此方向いて、欠伸したなどは頗る愛嬌であつた。數多たび射損じては、はてなど小くびかたげて弓見る人もあれば、ひやうと放つて頭なでらるゝ人もあり。今日は、三年生諸兄の送別射故月桂冠は彼等に送らん爲、わざと射損ずるのであるなど、負ぬ氣の出駄羅目吐くもありまた後二手あれば是にてつるべ束するなど云はるゝもあり。『初心の人二ツの矢を持つ事なかれ後の矢を惜みて初めの矢をなほざりにする心生ず云々』と、兼行法師の云はれしは是なんめりと今更の様に思出された。はわき矢射て、あづちの前にたまりま水をばつと射上げて、どつと笑はるゝを、負けぬ氣の、水にうつりし的のあまりに面白くて、殊に長く射上げなれば、一寸射て見たりなど、逃げ口上吐かるゝもあり。是等の人を屋嶋の陣頭に立たせなば、夫れこそ扇はさて置き、緋の袴を射らるゝ連中であらう。

はわき矢を恐れて、高く壁を射らるゝ人もあり。中にも金の將軍ベロリの守が、射損じて三寸の舌ベロリと出されまななどは、誰れも腹かゝへぬものどてなかつた。

總じて此日は當り矢余程少なく余田先生及び矢野氏の四分を初めとして、生駒師範、堀先生の三分より東師範、野村、鴻巣、二階堂、諸氏の二分、下つては大平部長、緒方、園兩先生、内藤、太田、平田、八尋、今井、澤、稻川諸氏の一分など殊に興さむる程の不出來であつた。中にも諸先生方は云はすもかな。内藤、平田、今井氏等手さゝの老武者の面々が一分とは實に言語同斷と云つて宜しい。是れだもの雨の降つたも無理はないて。

當日余田先生の金的と四分とを射られしと、矢野氏。四分の中三分の星を射、殊に最後の立に束をせられまなどは誠にお手際であつた。

最後に競争射を行ふたが一等の月桂冠は余田先生の手に落ち二等矢野氏三等堀先生四等生駒師範五等鴻巣氏六等東師範七等野村氏八等二階堂氏九等稻川氏十等八尋氏十一等平田氏十二等園

先生十三等内藤氏であつた。和氣洋々の中に茶菓を喫して芽出度射納めまは、日もはや金峰の山に春きて、夕ばえの雲の景色うるはしく、晚鳥啞々時に急ぐ頃であつた。

### ○最終演說會記事 (委員投)

五月廿九日、本學年最終の演說會を開く。友田教授の講演あるが爲めか、辯士の顔觸れ盛なりしが爲めか、豫定時刻を過ぐることも僅かに三十分にして聽衆既に數十。委員即ち立ちて就任の辭前回の續きと述ぶること十五分、曰く『吾輩が本部に對する方針は乞ふ之を次回に譲らん』と。既にして集まるもの益々多し、辯士即ち壇に上る。

### (一)内藤善助君

君は『十年の計』と題し、初席辯士の作法と云て、十數分に涉れる前口上を述べられたり。曰く『演說部を一部の占有に委ぬるのは遺憾である。一部生に演說の必要なるは、吾々二部生に其必要なるを證する譯ではない。余は隗より始むるのである。余は五百金に買はれたる馬骨である』と、雖然演說部の豫算は僅々四十八圓五

錢、如何でか五百金の支出を得ん。吾輩は斯かる迂策を取らずて、櫛組の間。先づ領袖の歡心を買ひ、以て爾後全部の新進諸豪をして、奮然其後に續かしめんとしたるのみ。乞ふ其説を聞いて吾言の眞なるを知れ。曰く『百年の計は人を教ふるにあり、十年の計は樹を植ゆるにあり、吾人は將に此計を講せん』とす。此計は樹木夫れ自身に關するよりも、寧ろ國家の安寧幸福に關するや大。若し降雨の四分の一が葉につき、他の四分の一が根幹枝葉につき、松葉の落ちたるが五倍の水を吸ひ、苔の生へたるが十倍の水を湛ゆるを知らば誰か山林と河川との關係を否定するものあらん。其他山林と氣候、山林と漁業の如き、木材の供給、製紙の原料とての効用の如き、皆國家の安寧幸福に至大の關係あらざるはなし。咄、我國山林の現況如何。之を統計に徴するに、人死々家流れ、宅地陥没し、桑田沼澤と變せざるもの、僅々三年の中無慮一億三千萬圓を以て數ふるに至る。國有の山林三千萬町、吉野人の所有林八千町、得る所年に三十萬金、之を比例せば、官林の歲入一億に上

るべきに、事實三十六萬圓に過ぎずとは、洪水と兩々相對して山林の荒廢を證するものにあらすや』と。山林には。由來虫類の害あり、驅除の任に當るは夫れ君が任歟。

### （2）、三澤糾君

君は隠れもなき花陵會の元老株『宗教的情緒の心理上の位置』と題て説く所のサーモン果して如何。曰く『余はサーモンを試むるものにあらず、余は唯宗教心と云ふ能力が、心理學上如何なる地位を占むるかを論せんのみ。先づ感情を分ちて三とす、一に曰く利己的感情、二に曰く社會的感情、三に曰く超脫的感情。一には恐怒活動競争名譽等を含み、二には愛尊敬同情等を含むと雖も、皆一長。一短を有し、獨立放任せしむべき資格あるものなし。其長を助け、其短を補ひ、能く千感萬情を統一引卒するに足るは夫れ唯超脫的感情乎。此感情に二種あり。道徳及び宗教是なり。後者は前者を含むも、前者は後者を含まず。後者を以て前者の根據とする時は、失望間に希望を生じ、暗黒の裡に光明を見る。内珍藝留の烈行も、利敏具斯頓の探險も、

此種の希望光明により人間以上の精力を致發せしめたるの致す所。是元長博士の所謂精神の集中統一の效果にあらずして何ぞや云々。説く所諄々、抽象的議論を組織することを布を織るが如し。但し道德宗教の大小論は、俄に吾輩の信する能はざる所なり。

### （3）大木俊九郎君

七寸の筆、三寸の舌に如かんやとは、吾輩が敢て痴戰を雜誌部に挑む所以にあらず。時と處と事情とによりては、後者の遙に前者に勝ることあるを云ふのみ。爰に前雜誌部委員桃江大木君、夙に龍南の美風日に滅却するを慨し、誌に據りて侃々諤々の言を連ぬること期年。大家の覆る一木の支ふる所にあらず。弊風日に増し墮落月に甚だしく、折角の硬語も馬耳東風と聞き流れて、恬然身に仔細を生ずるを顧みず。桃江子豈平なるを得んや。即ち慨然起て演壇に登り、『龍南の風雲』と題えて、孤憤の音を放たるゝこと痛快又痛歎。吾輩は激烈なる同情を以て之を聞きぬ。否寧ろ聞きまは唯外形のみにして、内心は盛に夫れとシミラーの演説を試みつゝありき

吾輩は如何なる筆を以て士辯の眞情を寫し、如何なる文字を以て吾輩の感激を現はすべきかを知らず。而も當二百の聴衆諸君は、吾輩と等しき印象を其肝膽に銘せられざるもの、諸君願くば其印象を以て更に之を他の肝膽に刻め、吾輩亦爰に余音を採録して其欠を補はん。其辭に曰く、  
『人若し龍南の元氣を昔日に比して、上か中か下かと問はば余は一二を否定まて三を肯定せざるべからざるを悲む。元氣の消沈は學生の自滅也。見よ、謙讓の風は如何、見よ質朴の風は如何、見よ上下宿屋の狀態は如何、里謠猶以て邦國の盛衰を卜すべし、堂々たる我校の學生にして、白晝机に倚りて俗曲を唱ふるを耻ぢず。酒三行既に業に醜俗痴劣の韻にあざれば、反應を呈せざるが如く、軟化するは抑も何の兆ぞや。人或は酒を以て辯せんも酒は決して人魂を奪ふものにあらず。誠に思へ當年の武人誰か大小を酒坐に残したる』とて辭色共に激え、聲音益々凜冽、滿堂肅然として襟を正え慨然とて腕を扼する多時、時に同情の迸りてインターヂエクションとなるを聞くのみ。挑江王更に其言を續けて曰

く、然らば此弊風を一洗し醜類を掃討するの策如何。龍南會や、雜誌部や、演説部や、豈此等の策を試むべき機關にあらずや」と論ぜらるゝに至りては、吾輩の意見と符節を合するか如きものあり。勿論南阿戦争の話も随分明白き所あり。生存競争の説も丸で理なきにはあらず。而も龍南會の目的に關し校風寮風に關する研究にして、度外視せらるゝ如き事あらんか、其部は以て雜誌演説の看板を揚ぐるに足らず。而て「此機關に投じ猛然凡族の驅逐に従事せしむるもの、果てて幾人かある」と熱訴せらるゝ處、輒ち吾輩の深く腦裡に銘じて速に解決に着手すべき處にあらず乎。

(4) 菊池剛太郎君

殖民論なる題下に説く所、之を次の三段に分つことを得べし。曰く殖民史、殖民地の種類、及び殖民論是なり。劈頭先づ史を論じて曰く、「吾人が今日言ふ所の殖民なる語は、新大陸發見以後の殖民にのみ適用すべし。即ち當時西、葡、英の諸國或は亞米利加に、或は印度に、先を争ひて殖民せたりと雖も、完全に成功したるは英人

のみにて、吾人は之に依りて、人種宗教利害の同じからざれば、一國を形造り能はずとの教訓を得たり。」とて結論の伏線を布き、次に殖民地の種類に(一)國權の發展、(二)國民の發展、(三)以上兩者を兼ねたるもの、三種あること、及び第三者にあらずんば永續せざることを詳論す。最後に以上の論は人口の増加を前提としたるものなるが、我國は確に此要件を備ふとて、統計を引き出し、加ふるに我が國民の皇室に對する中集力は、母國と殖民地との連絡に世界無類の利長を有し、人種宗教利害等の點に於ても英國と酷似せる地歩を占めたるを見れば、殖民は我國百年の大計に於て世界統一の任は、日本民族の双肩に掛けりと。結ぶに至りて氣焰最も昂揚たるを覺えぬ。

(5) 別府三種三郎君

菊池君と共に演説部委員とて、赫々の功勳を龍南會に樹てられたる別府君は吾輩の請囑により、新帝國なる題を揚げて「靜かに打掛け」の號令を下せり。曰く「帝新國とは余が空想せる帝國なり。此帝國は誰が作るか、曰く余も其一

人なり。何處に出来るか、曰く東洋に出来けん。何時成るか、曰く近き未來に於て成らん。』とて轉頭一番東洋の形勢を揣摩て曰く『……………であるから……………である……………馬鹿なことでないが、……………であるから是非……………ねばならぬ』

と随分要領を得ざるとの多かりしは、閣下ブランデーの過ぎしが爲めにあらざる乎。兎角其帝國の首府は矢張り東京にきて、版圖は支那朝鮮比律賓を含み、北京、漢口、マニラに總督を置き、内閣は閣下自ら組織せらるゝと言へば、二三部の人々は又法科生の法螺とて笑はんも、此空想の現實するや否やは、三十世紀の歴史家にあらざるば知らじかし、嗚呼先きには菊池君の殖民論、遠き未來に於て世界統一を企つるあり。今又別府君の新帝國近き眼前に巍然として聳ゆるあらんとす。法科生の心事快哉と叫ぶの外なし焉矣。

### (6) 三原新太郎君

吾輩は耶蘇教を聞けば、直に三原君を聯想す。君は華陵會の會頭にあらざれば、則ち參謀長なればなり。君は『人格論』と題して、人格とは

完全なる心と体とより成ると云ひ、心的人格は日本古來の主宰と稱するものにきて、文天祥の獻身ソクラテスの毒死、皆是有るが爲めに、爾かく從容たるを得るなりとて、少しく鋒銳を現はし、次に体的人格を論じ、病軀弱体の爲すなきを痛罵すること頗る巧妙を極め、波瀾出沒滔々焉。堂々乎、鋒は漸く轉じて大喝一聲、科學界の眞理と精神界の眞理とは一致す、喝破之、例を近く丁學部に取り、蒸氣逆り機械有るも、やなくんば運轉を始むるに由なきと等しく、人あり智徳あるも信仰なくんば、焉んぞ活動を始むるを得んやと結べり。斯く概綱を記するとき、何でもなきが如きと雖も、實は短かき時間の中に滔々數萬言、頓挫、波瀾、照應、千變萬化極りなく、目の附け處、机の昂き振りに至るまでドーも、流石はと云ふの外なかりき。然りと雖も信仰とは御宗旨に限るが如く、言はれ、吾輩の助力者として早速クリスト君を紹介せられ、此信仰なきときは人は恰も、無機物と異ならずと、鼓吹せらるゝに至りては、吾輩有機物の容易に首肯する能はざる所。外道の濟度は世



の澆季に連れて益々困難なるを奈何せん。

以上六名の諸君は皆數旬の中に本校を出で、大學に進まるゝの人。試験眼前に迫るに關せず、又演説時間を三十分と制限したるに係らず、猶吾輩の愚を以て豎子教ゆべしとなし、胸中藏せらるゝ所の大思想大抱負を、各自の長所に任せて惜氣もなく、公開せられたるは、吾輩後進一同の深く感謝する所なり。然りと雖も、生等は更に大に感謝せざるべからざるものあり。教授友田先生の寫眞の話是なり。話終つて、茶話會を開く。時正に十二時、先生の講話は之を次號の雜錄欄内に掲ぐ。

### ○擊劍紅白勝負

單に強壯な圓滿な牀格を作ると云ふ點から見れば、柔術の方が擊劍に勝つて居る様だが、而してこれは一長一短で、氣を練るとか、武士らしい氣風を養成するとか云ふ點から見れば、何うも擊劍が柔道に勝つて居る様であるとは或時某先生から聞いた事であるが誠に尤もな説である。而して何にまても、健全な牀格を養ひ、奇拔な剛毅な氣象を備へて、今日柔懦に流るゝ社會一般

の風潮に漂はされまいといふ決心を持つて居る青年の大に奮勵えて益々盛ならまむべきは實に此武術であるのである。由來九州の地は何處も昔から武術の盛な土地であつたので、從つてそれ等の土地から集つて來る人々の團體なる我校に於て武術の盛なは勢の然らまひる所とも云ふべく、龍南淳朴の風は全く此武術の盛大から生み出されたと云ふても憚らないのである。斯う云ふと例の己惚の様であるが決えてさうでない實際外に對する競争の少い我校で、此程迄に盛んなのは大に多とすべき所である。今回擊劍紅白も意想外に盛大であつたので、同部委員諸君の満足もさこそと思ひやらるゝが、又此記事を草する雜報子の喜びも亦實は察して貰い度いのである。扱ても此勝負は去月廿五日午后三時より例の道場にて催された。先づ數番の前仕合が有つて、三時廿分頃より愈々紅白勝負が始まつたのである。東側の壁附にズラリと並で控へたのが紅軍で、西側の溜りに之に對して控へたのが白の軍勢、兩軍合して四十八名。その後の黒山が見物人であることは云ふまでもない。檢

證は中島野田の両師範南北に席を占め、會田教授は優勝者の賞品堆高き部長席につかれ、夏目兒島の兩教授及び嶋野、緒方、堀の三体操教員も臨場されて居つた。

扱て、委員の呼出しに應じてしづ／＼と進み出まは、紅軍より宮崎、白軍より山邊、式の如く禮終りて愈々戦は始まつた。以下順を追ふて其景況を述べて見やう。駄評もして見やう。果して當るか何うだか知らぬが、

○宮崎・紅——山邊（白此勝負は云ふ迄もない山邊氏のものである胴二つとも立派と云ふの外なしだ。

紅	白
宮崎	山邊
廣木	山邊
高崎	山邊
園田	山邊
渡邊	山邊
平田	山邊
常吉	八田
常吉	石川
常吉	久家

廣木——山邊。初太刀廣木氏の面は充分であつたが同時に山邊氏の奇麗な胴と差引かれて消えて仕舞、頻りに面を打たんと狙ふ廣木氏は哀れ又もや胴を斬り込まれてたゆたふ所を、續きて小手を切られて少し輕かつた様だ

常吉	常吉	常賀	氏原	木下	木下	木下	木下	上野	上野	上野	上野	木下	木下	澤村	菊池	菊池	妹尾	廣松	堤	堤	堤	堤	天野	天野	天野	萩野	萩野	厨野	厨野	奥名	厨川	戸澤	戸澤
中島	吉浦	吉浦	吉浦	吉浦	飯田	澤村	菊池	菊池	妹尾	廣松	堤	堤	堤	堤	淵野	淵野	淵野	淵野	淵野	淵野	淵野	淵野	天野	天野	天野	萩野	萩野	厨野	厨野	奥名	厨川	戸澤	戸澤

が檢證の取る所となつて白の勝となつた。

○高崎——山邊。先登の若武者二人迄討つて取つたる山邊氏の振舞を面憎しと躍り出でし高崎氏も力足らねは詮方なく、廣木氏と同き筆法で返り打ちに成つた。

○園田——山邊、園田氏の太刀は至つて温かい奇麗な筋の様ではあるが、まだ若い。

老練な山邊氏の敵ではない。初太刀に面を取つて喝采を博したが、二本目に小手を取られ、勝負に山邊氏得意の胴を取られて討死。  
渡邊——山邊。一人の敵に捲くり立てられて連戦連

澤	澤	澤	澤	松	松	松	松	岡	岡	戸
野	八	行	行	上	今	森	森	石	石	澤
口	次	木	徳	田	井			田	田	

敗の紅軍今や殆ど顔色なく誰か之を挽回する者ぞと見てあれば、奮然躍り出でたる渡邊の薩摩隼人、膚胴の如く髹漆の如く、其打ち込みの強さ云つたらぬ。而し剣の棍棒流義で變化に乏しく勝負には不向である。又負け

た。

○平田―山邊。新手を入れ替々々揉まれたので流石の山邊氏も次第に疲れて来て、此仕合では疲勞は殆ど絶頂に達したのである。而し其疲勞の中にも能く其姿勢を顧さず、初太刀に小手を取られたのみで、面と胴にて敵を破つたのは感心なことである。疲勞の故を以て引いた。無理ならぬことである。一体此人を先登に置いたは番組の誤りで、堤、廣松邊りに編入すべき者で有つたらう。何れにしても僅かに二ヶ所の傷を受けたのみで六人の敵を斃したは天晴れの功名であつた。

○常吉―八田。双方共柔道部での聞け者とは聞いて居つたが、擊劍もとは案外であつた。常吉氏の太刀は想峯生の筆の通りで南遊紀行を讀む者はまた容易に其太刀を想像することが出来る彼の太刀は彼の演舌、彼の行筆の如く然りと民友社口調を出し度ひ所だ。小手が中々にうまい。二本共小手で勝つた。八田氏の方は諸君の想像に任した方が宜からう。

○常吉―石川。初太刀に石川胴を得、次で常吉また胴を得其後接戰數分に渡りしが常吉の小手は又能く肯緊に當りて紅の勝となつた。

○常吉―久家。白の突は見事であつたが、面と小手にて脆くも破られた。

○常吉―中島。別に云ふ程の仕合ではない。

白面、紅面小

○常吉―吉浦。吉浦氏の上段の構へ馴れたものなり。一進一退能く其度に適ひ八木流の妙を得たる者と云ふべしだ。白軍の剛の者四人を打ち取りたる流石の想峯生も、之には敵しがたぐやありけん、二本共面を割られて引き退く。

○値賀―吉浦。値賀氏の胴は當つた様では有つ

たが輕かつたので檢證の取る所とならず。兎角する内に上段より直下打ち下す吉浦氏の面は、見事に二回其効を奏して白の勝となつた。

○氏原—吉浦。柔能制剛、強き者必しも強からず、余は此試合に於て今更の驍に之を感じたのである。ソラ行くぞと叫びながら阿羅修王の荒れたる如く滅他打ちに打ちかゝるは紅の氏原氏である。此ハードスームを柳に風と受け流して善い加減にあしらつて居るのが白の吉浦氏である。吼へ、猛り、鳴鳴り、狂ふ前代未聞の仕合は茲に始まりて、滿堂觀るゝが如く、見る者も皆果氣に取られて手に汗を握らぬはなかつた。而も此囂然たる喧闐の中に沈靜なる檢證の聲は一度び又二度び胴一本と叫んだ。忽ちにして嵐は止むで雨は霽れた、果然檉は折れて柳は全かつたのである。

○木下—吉浦。氏原氏から散々な目に遭せられた吉浦氏は再び敵の剛の者木下氏と出合はねばならぬのであるが、疲れた勢でもあらう、また以前の輕快なく、面一本取つたのみであえなく討死したのは残念だつた。

○木下—飯田。余り面白勝負でもなかつた様だ。飯田氏は面を狙ふこと急なので胴のすく弱點がある。

○木下—澤村。白の澤村氏中々元氣は有つたが、あはれ二本とも面を取られて敗けた。

○木下—菊地。白の菊地氏は柔道と掛持の勇士、勝ち誇つたる木下氏を二回ともお面より打ち蹴へたるは感服の外なし。

○上野—菊地。白の上野氏姿勢も掛聲も奇麗なスタイルだが今少しく烈しくと思ふ節もあつた菊地氏先づ胴を取つて接戰數分に渡りて各得る所なし。既にして上野氏俄に勢を増して小手二本の勝を制したは天晴な勝負であつた。

○上野—妹尾。一時は小天狗とまで呼はれし妹尾氏、此度びは頗ど勢なく面と胴と二本取られて敗。

○上野—廣松。白は小手を得たるのみにて、紅面と小手を得て勝。

○上野—堤。紅胴、白突面。

○俵—堤。紅の俵氏は掛聲も活潑で頗る元氣はある様だが、業は堤氏に及ばざること一步、惜

むべしだ。

○町田一堤。町田氏と澤村氏同じ様なスタイルで共に有望の劔士であるが、此日共に同じ様な敗を取られたのは寧ろ奇。

○田尻一堤。初めに白小手を打ち次ぎに紅胴を得しも再び小手を取られて堤氏の面。氣持ちの能い仕合であつた。

○天野一堤。紅の面にて堤氏敗

○天野一淵野。二本共小手で至つて簡單なものであつた。

○萩野一淵野。初めに淵野氏小手を得て、次で萩野又小手二本を得、徹頭徹尾小手盡しの勝負であつた。

○萩野一辻。紅小、白小面。

○厨一辻。厨氏の氣鏡なか／＼に當り難く面小手二つなから取られて辻氏の敗

○厨一増原。増原氏は長身塊偉、袴の裾まくりながら突立ちたる様、姿勢は余り善くないが、一見二癖有りそうな寧ろ怪物である。果然其電の如き鋒先さは幾度となく厨氏の面上をかすめて、勝は勿論白に歸した。

○奥名一増原。此勝負は思ふたよりか氣安く済むた奥名氏今少し抵抗の有るであらうと思つてたが、増原氏の長身の上段から打ち下す面と小手ともに能く効を奏して白の勝となつた。

○厨川一増原。厨川氏の太刀の早きこと云つたらないが、稽古の足らざる結果は終に不覺の敗を取つたのである而玄氏の胴は見事であつた。唯惜むらくは敵を打つに急にして己を守るに缺くる所ある様である。

○戸澤一増原。紅軍の强者三人を討て取つた増原氏は益々勇を振うて戸澤氏に戦を挑むた。戸澤氏短身にまて肥満、力量計る可からずと稱せらる。昨冬の紅白勝負に於て奇捷を博えてより一躍えて幕の内に進み今や我が撃劔部に於ても錚々たるもの、此仕合の興味多からむことは皆々豫期えて居つた所であつた。實際また豫想以上に興味あつたのである。初本目の増原氏の胴能く効いたれど、戸澤氏の面小手亦共に功を奏えて勝利は戸澤氏の頭上に加へられた。

○戸澤一内藤。弓矢取つては龍南に敵なき内藤氏は撃劔部にも老力の勇將である、之が新進の

戸澤氏との勝負で有るから頗る觀者注意を惹いた。丈も揃ひ氣合も慥かな寔に好き取組であつた。戸澤氏の上段の構へ方頗る奇、紅面、白面にて内藤氏の敗となつたは残念至極。

○戸澤―石田。戸澤氏は相變らず太刀を上段に翳して立ち合うたが、小手を一つ得たのみで兩度面を喰つて石田氏の勝となつた。石田氏の掛聲は盛んなものだ、寧ろ仰らしい方だらう、而も活氣のある使ひ方だ。

○岡上―石田。戸澤氏に代つて優然と立ち出でたのは、巖丈な岡上氏である。沈重な態度を取つて堂々平敵に肉迫する有様は頗る愉快な見ものであつた。眞向より打下す面の一撃過たず、續いて打ち下す小手と共に見事な勝を取つた。○岡上―森。森氏の太刀は輕快だ。胴は其得意とする所と見える。堅きに過ぎて融通の少い岡上氏の敗は至當といふべしだ。

○松山―森。委員の松山氏といへば龍南劍界の重鎮、森氏とは大分距離のある様だ、小手二回とも牙えたものなり、立派に岡上氏の敵を打つてのけた。

○松山―今井。これは面白い仕合だつた。擊劍の形容詞に面白いが不穩ならば、愉快とても壯快とても云べし。兎に角面白かつたのである。

大會毎に殆ど此組合のないことはない。而して其都度今井氏の敗に歸したので、氏も今日こそはと力を入られたと見えて、それはく劇しい攻め方であつた。今井氏は長劍松山氏は短劍、一つは離れて面を狙ふに善く、他は肉迫えて胴を切るに便なり。今井氏先づ面を得しも再度胴を切られて勝利は又もや松山氏の有となつた今井氏の無念さこそと思ひやらる。

○松山―上田。丈と云ひ業と云ひ、スタイルと云ひ此兩氏程似たものはないからう。余り能く合ひ過て居る丈は業も比較的變化が乏しく却て興味の少い様な感じもした。総じて土佐の劍士には其スタイルに一貫した特色があるが、此兩氏は其特色を充分に發揮したものと云はねばならぬ。小手二回効を奏して松山氏の勝。

○松山―行徳。兩委員の立合だから面白からぬ筈はなく此日第一の見物であつた。立ち上り様一聲喚いて打込む行徳氏の面一本確に正鵠を得

て満堂の大喝采を博した。出合頭にお面を喰つて先づ膽を奪はれた松山氏は、例の小手にて一時は支へまも、替勢之を返すによしなく、再び面を取られて行徳氏の勝となつた。是非もない次第である。

○澤一・行徳。松山氏を敗つて意氣揚々たる行徳氏は直ちに進みて敵の中堅なる澤氏に迫つた。澤氏從容せまらず、莞爾とまて之に應戦する處天晴の大將軍やと思はれた。面小手で澤氏の勝利となつた。

○澤一・八木。八木氏の上段に對する澤氏のしこなしは感服の外なしだ。八木氏の舞ふが如き輕刀も終に一傷を敵に加ふる能はず、胴と小手で又澤氏の勝となつた。

○澤一・戸次。白軍の幕將多く打死えて愈々大將戸次氏の御出馬となつた。奇矯なる戸次氏と漂逸なる澤氏實に一對の好劍士。扱て何と云て形容したらよからう？。双龍玉を爭ふも陳腐だし、兩虎幽谷に闘ふも面白からず、あゝかかうかと、考ふる内に、割るゝが如き喝采と共に戦は終りを告げた。是れは戸次氏面と胴を切られて哀れ

の戦死を遂けられたのである。

○澤一・野口。白軍既に残りなく打死えて澤氏の元氣益々盛なるより、茲に紅軍の殘將野口氏を聘えて澤氏に立ち向ふ事にしたが、慄悍無類の野口氏も近來頓と稽古を怠られたので、勝ち誇つたる澤氏の銳鋒に當るべくもあらず。一つの面二つ迄割られて討死また。忽ち起る満堂拍手の音。今日の戦は日出度く紅軍の勝利に歸また。すぐり抜いたる敵の驍將四人迄切髷して、身に一傷をも受けぬ澤氏の意氣正に千秋ども云ふべきである。

會田都長の挨拶ありて閉會えた。時正に五時。例によりて茶菓の饗があつた。此日優勝者として賞品を得えは左の人々である。

山邊 武彦

常吉 德壽

吉浦林太郎

木下伊都磨

上野 義雄

堤 太平

増原 兵太

松山 重喜

澤 友 彦

○柔道紅白勝負 (部員報)

五月二十六日(土曜)午後二時より瑞邦館に於

て柔道紅白勝負を催しぬ、此日來賓としては兒嶋山田の兩教授あり、武藤教授柔道部長とまで臨席あり。柔道部委員阿部氏立ちて新任の辭を述べ開會を告ぐ、紅白兩軍の士、皆腕を扼し拳を固め今日こそは他人向にするぞと。言はぬばかりに相方睥み合ひたる様は、傍に觀るものをして、腦中已に其後の活劇を想像せしめぬ。

今取組を表とせば、

### 紅組

山口 均  
山口 均  
石川 重遠  
土屋 龍雄  
山口 織之進  
三澤 斜  
三澤 斜  
三澤 斜  
本山 久壽頼  
本山 久壽頼  
石河 兒三郎  
石河 兒三郎  
石河 兒三郎  
山元 喜二  
山元 喜二  
櫓木野 巽

### 白組

山口 乾輔  
俵 元重  
俵 元重  
俵 元重  
吉浦 林太郎  
村尾 正文  
堀川 熊次郎  
浦川 熊次郎  
浦川 熊次郎  
山田 俊郎  
前原 助市  
井上 成美  
岩永 巖  
森永 巖  
森利 巖

失野 哲二 漸  
原口 規三  
御厨 藤三  
佐藤 適  
佐藤 適  
野村 新  
野村 新  
中川 吉郎  
中川 吉郎  
今井 精一  
林 泰吾  
林 泰吾  
林 泰吾  
津田 哲二郎  
副嶋 豫四郎  
副嶋 豫四郎  
菊池 剛太郎  
菊池 剛太郎  
中村 剛太郎  
戸澤 民十郎  
一、山口乾氏、山口均氏、之れ兩軍の先頭にて白軍の乾氏先かけの功名せんとて勇み喜ぶ隙もなく巴投にて巴の如く投げられたり、  
二、山口均氏、俵氏、白軍より打出でしは俵の元重、未だ一度も瑞邦館裡に勇を競ひまことなれば、兩軍『なり』を静めて手際如何にと見

吉國 兼三  
樫谷 源吾  
樫谷 源吾  
樫谷 源吾  
今永 徹二  
岩永 徹二  
眞鍋 五男  
眞鍋 五男  
増永 元也  
増永 元也  
増永 元也  
氏原 均一  
熊澤 勁太郎  
熊澤 勁太郎  
熊澤 勁太郎  
平田 全祐  
大野 數衛  
阿部 直太郎  
阿部 直太郎  
阿部 直太郎



る處に、倭氏一種異様の態度を以て渡り合ひしが如何に考てか倒れたる山口氏に打乗りて元重固めたれば山口氏口惜ながら討死す。

三、倭氏、石川氏、紅軍の石川氏兼て稽古は日尙ほ淺けれども日頃熱心の事なれば、今日こそ御手際拜見せんと思ひま人はありや無きやは知らねども倭氏と取合ひ屢まが程は戦まが之も倒れたるを幸ひ、仕合よしと倭氏再び取り押へ骨折にて敗となりしは是非も無き。

四、倭氏、土屋氏一人ならず打ち取りたる憎き男かな端武者ながら男一匹打取らいで置べきなどと攻立く攻立つれど敵も随分覺あるもの双死力を盡して戦ふと云へども好相手なれば勝敗遂に決せず引分となる。

五、山口織氏、吉浦氏、山口氏は其の体格吉浦に比してはいと大に、一見吉浦の敵手とも見兼まが吉浦氏中々手強く當りて之も引き分く。

六、三澤氏、村尾氏、何れも劣らぬ好体格さても立派なる取組よと見たりしが三澤氏立合ふより早く機會を見横捨身を取りて勝つ。

七、三澤氏、堀口氏白軍より跳り出で三澤氏相

手に暫時もみ合まが長らくやらぬ柔道に氣合をや取兼ねん足拂を取られける。

八、三澤氏、浦川氏、味方の軍兵を惱む敵兵觀念せよと云ひこそせねと面に現はれて浦川氏勢鋭く攻立つる、三澤氏之を支えんとはまたれども何分新手の兵にあまらいかね、横捨身にて投げられけり。

九、浦川氏、本山氏、味方の強兵を打扑またる敵、取らずに置べきやと本山氏打寄りて浦川氏が仆るゝ處をすき間も見せず絞にて本山氏勝となる。

十、本山氏、山田氏、何れ劣らぬ強兵にて、互に秘術を盡きて戦ひもみ合ひ、本山氏屢く絞を試みまも其効見えず、共に大に疲れし折柄、山田氏過りて足指を痛め立ち兼ねて見えければ引分となる。

十一、前原氏、石河氏、出合ふと見えまもなく組合ひて互に絞を試みまが石河氏絞よくして前原氏まがしが程は前後不覺に落ちけるこそ哀なれ。

十二、石河氏、井上氏、石河氏は絞にて勝たん

とし井上氏は勇ましく腰術にて攻立て攻め立ていどみしが又もや石河絞を奏きて勝となる。

十三、石河氏、岩永氏、白組より出でし岩永氏は見上ぐる計の大の男にて、疲るゝ石河ござんいざ一もみど合しが數度の合戦にさしもの石河氏も、大の男に敵え兼ね出足拂にてよろゝとなりて負にけり。

十四、岩永氏、山元氏、紅軍より出でま山元氏体格小どは云はねども岩永氏の大兵には大に苦心の体に見受くれど左にかはま右にさけ是時こそはござんなれど電光石火大外刈をかければあはやと云ふ間に岩永氏ドーつとばかりに仆れける。

十五、山元氏、森氏、山元氏白より攻むる大男まかも業もすくれし森氏に立合しが遂に森氏大外刈にて勝をとる。

十六、森氏、榎木野氏、骨組力量よくつり合たり、立業寝業大に試み合ひ果はつかれど絞固となり見る人汗を握りまが遂に引分となる。

十七、吉國氏、矢野氏、吉國氏は天晴腕力武者柔道熱心者とて數へられ、黒帶昇級者の一人

なりさりとて矢野氏も矢ッ張り遣手、戦中々決せず、吉國氏の絞は妙なれども遂ひに引分となる。

十八、原口氏、榎谷氏、孰れも腕力家の聞へ高き人々にて互に競ひにゝまが原口氏病氣にて長く休みま其の爲にや氣や續き兼たりけん將た力や劣りけん遂に榎谷氏の横固となる。

十九、榎谷氏、御廚氏、格好の好敵手なり御廚氏は業にて敵を跳飛さんとし榎谷氏は力にて之を制せんとせしが御廚氏足拂にて八分は得まも遂に組討となり榎谷氏の足絞にて一本とらる。

二十、榎谷氏、佐藤氏、さすがに強き腕力家二人までも組取りたる榎谷氏も果は疲や來りけん又は佐藤氏の業や優りけん互に立合ふ暇もなく首折にて佐藤勝となる。

二十一、佐藤氏、今永氏、今永氏体こそ佐藤氏の如く丈夫ならねども業はたしかにきゝたる好男子、黒帶たるもの如何で敵せぬ事やあるどの氣込にて進みし甲斐も著しく大腰返にもろくも佐藤氏は敗となる。

二十二、今永氏、野村氏、野村氏は黒帶に昇級

者勢込みて攻立つる今永氏も應戰頗る力めしが遂に野村氏大腰にて哀れや花は散にける、

二十三、野村氏、眞鍋氏、体格力量も似たりしが新手の勢に堪へかねて足車にて見事眞鍋氏の勝となる、

二十四、眞鍋氏、中川氏、中川氏亦黒帶に昇級者の一人にて眞鍋氏としばし戦ふ程もなく体落にて中川氏勝となる、

二十五、中川氏、増永氏、増永氏は攻手となり中川氏は防手となる、増永氏背負を試みても中川氏の力には容易ならず巴を試しも引手確ならずして其の志を達せざりしも再三の試みに遂には功を奏えける

二十六、増永氏、今井氏、目勝まさりたる増永氏此奴も序にと勢鋭く進みよる今井氏左によけ右にかはえ縦横に横捨身をかけしも甲斐もなく増永氏の巴は又々功を奏してあたら今井氏もさそふ嵐に散にける

二十七、増永氏、林氏、増永氏に比せば林氏は体もいど大なり、二人まで仆したる増永氏も之の新手の大兵には支へ兼ねたりけん林氏の小外刈

は忽ち功を奏して勝となる

二十八、林氏、氏原氏、体格もつり合ひぬ、林氏は勝ちに乗じて勇み立ち氏原氏は敵の剛者仆さじやとて猛りかゝり背負とせまも林氏之をはねかへし暫し勝負の程も見へざりしが、林氏の小外刈は又々功を奏えぬ、

二十九、林氏、熊澤氏、味方の軍兵二人まで取りたる強者敵ながらも感心な仕る褒美とらせん參らせんと足車にて其名瑞邦館裏に轟き渡る熊澤氏いざや來れと云はぬばかりに取組みて攻めつ守りつ戦ひまが熊澤氏の足車例にたがはず林氏避けかねてどたはれける、

三十、熊澤氏、津田氏、津田氏亦足車にて其名を聞ゆ、足車の戦こそは花々まき、津田氏横捨身思ひ切りてかけられぬ其効なく熊澤氏の足車前例により功を奏しぬ、

三十一、熊澤氏、副嶋氏、攻めつ追はれつ暫が程は戦しが副嶋氏の追掛腰にあふなくも敵は驍將を失ひぬる

三十二、副嶋氏、平田氏、平田氏足車にて攻め寄れば副嶋氏之を避け副嶋氏腰入れんとて攻め

寄れば平田氏之をさけ立業癡業交々試みまも孰れも効なく後は互に防勢となりて引分となる、三十三、大野氏、菊地氏、白の副將大野氏靜に出で、菊地氏出で迎えてぞ戰は開かれぬ、敵も味方も諸共に勝負如何にと目をこらす、暫まは何れ勝とも分ざりしが菊地氏、大野氏の右腰に寄ると見へしがハヤ早く敵に暇をかすべしやとウンと力を入れければあはれやの白の副將はもろくも露と消失せぬ

三十四、菊地氏、阿部氏、之をば見たる白の大將阿部氏は怒氣は顔にはあらはれぬ味方の副將打取るとは分限不知の不遠慮者と心の中に含みつゝ猛りはやりて攻めかゝり菊地氏腰車にてまゝそんなる其折こそはよけれと御大將たはるゝ敵手をいと優に縦に四方を固めければ、あはれ敵の副將打ちて功名せし剛の菊地氏もはね返さ兼ねてぞ敗となる、

三十五、安部氏、中村氏、左によけては右にかはしその鋭鋒を避けて巧に敵を操りまは逸を以て勞を待ち敵の大將を疲らして我のちに代りて出でん味方の大將の勞を少々なりとも省かせん

とてよ流石に白軍帷幄の副將古に聞さし老師賢將の計にも優りて有りかだし、さりとて紅の大將は龍南屈指の名將、一騎當千の手際はたまかにあり白の勇士其の智あるひは饜膾を欺く可けんも以て子房にあたる可らず敵の鋒ささするどきに支へ兼ねてぞ見にける、之を見て取る白の大將機會は今を來りけりと中村氏の体、前に浮くよと見るより早く腰を入れウンと許りにはねければあはれや赤の副將ははね腰にて見事一本まゐりけり、

三十六、安部氏、戸澤氏、愈兩軍の御大將勝は何れか不知火の白組赤組差別なく手に汗握りてぞ見守りける、責任重き大將なれば何れも輕々は踏み出さずいと嚴重にぞ立合ひける、阿部氏の体浮立つところさかず戸澤氏腰車思切てかけければアハヤたはるど見ればこそはとも如何にたはれんとて立上り立ち上りさす背負かくれば戸澤氏たまされじとひらりとかわす、互ひに攻めつ防ぎつゝ死力を盡す其様は何れ劣らぬ智勇の良將見たる事もなきそのひかま川中嶋に兩將が切りつ結びし古事もかくやありけむと思へ

ば宛ら龍驤つて雲を起さ虎嘯ひて風を呼ぶに異ならず暫しは兩軍物をも云はず見守りけるが阿部氏は相手の体の右に傾く其處を大外刈にて刈立てばあはれや紅の大將は見事に刈りなげられ拍手喝采の其中に其の日の勝負はすみにける、勝負了りて武藤部長は黒帯に昇級者に黒帯を授與せ優勝者は賞品などをとらせぬ、今度の昇級者の氏名を挙げれば左の如し

貳級乙へ

阿部 直太郎

參級甲へ

大野 敷衛

平田 全祐

戸澤 民十郎

三級乙へ

福地 周次郎

副嶋 豫四郎

中野 太三郎

四級甲へ

竹添 一熊

氏原 均一

四級乙へ

渡邊 寛人

林 泰吾

今永 徹二郎

五級甲へ

於保 庫一  
中村 嚴

菊池 剛太郎  
熊澤 勁太郎

津田 哲次郎

松隈 三郎  
増永 元也  
木下 伊藤磨

梶谷 鎮之助  
吉國 兼三  
大森 國吉  
中川 吉郎

今井 精一  
古賀 傳吉  
野村 新  
永沼 秀雄

五級乙へ  
松本 虎太  
矢野 漸  
土屋 龍雄

山田 俊郎  
石川 重遠  
河野 通博

六級甲へ  
浦川 熊二郎

吉浦 林太郎

六級乙へ編入  
澤村 榮美

附記 此日戸張師範福岡の武徳會に臨場せられ之を以て吉田久太郎氏代りて審判の勞を取られたり。茲に記えて勞其を報ず。

○寄贈雜誌

(自三月至五月)

校友雜誌	一	豐津中學校友會
榮城	九	佐賀一中榮城會
校友會雜誌	六	宮城中學校友會
京華校友會雜誌	五	京華中學校友會
同窓會報告書	二	福嶋一中同窓會
同窓會報告書	一	長崎商業學校商友會
華陽	二〇	岐阜中學華陽會
六稜	一六	大坂府一中校友會
校友雜誌	六	宇和嶋中學校友會
學友會雜誌	二	札幌中學學友會

明治三十三年四月  
圖書增加表

圖書部類	和漢書		洋書		合計	
	部數	冊數	部數	冊數	部數	冊數
哲學	一	一	二	二	三	三
理學	一	一	七	七	七	七
技術	一	二	四	五	五	七
雜書	一	二	一	七	二	五
合計	二	二	三	四	一五	六

共成會々々誌  
校友會雜誌  
全陰  
桃陰  
矯々會雜誌  
無盡燈  
帝國青年  
北友會雜誌  
學友會雜誌  
校友會雜誌  
國士會雜誌  
帝國文學

七七  
二九  
二〇  
一〇  
六六  
每號  
七  
二六  
二六  
二六  
六九  
三五

岡山師範共成會  
城北中學校友會  
開成中學校友會  
大坂府中學校友會  
久留米中學矯々會  
無國青燈  
帝國青年會  
山口高學校友會  
第四高學校友會  
第一高學校友會  
造國文學會  
帝國文學會

教育公報  
教育時報  
兒童研究  
研瑤會雜誌  
學友會雜誌  
ちよくとくはん  
丁魯倫理會講演  
九州教育雜誌  
六合難誌  
貧兒寮月報  
同窓會雜誌  
獨逸語學雜誌  
三三  
三三  
三三  
三五  
七九  
三九

帝國教育會  
開成會  
長崎醫學部研究會  
第二高學校友會  
湯本武比古氏會  
丁魯倫理會  
九州教育雜誌  
ゆにてりあん弘道會  
熊本貧兒會  
熊山學院同窓會  
獨逸語學雜誌

明治三十三年 生徒圖書閱覽表

(日數十八日間)

圖書部類	冊		數		閱覽		人
	和漢書	洋書	合計	百分比	和漢書	洋書	合計
哲學	三九六	三	三九九	三三・二	六	三	八
社會學	四四	一	四五	二六	三	一	四
文字學	三三	一九〇	二三三	一三・四	七	一八四	一九一
文學	七〇	一六二	二三三	一三・五	六	一五〇	一七六
史傳	一四二	三九	一八一	二〇・八	四	三九	五四
地理	三三	三	三六	二・〇	一	三	四
數學	一八	二六	四四	二・七	一	二六	二七
醫學	一	一	二	一	一	一	二
兵學	一	一	二	一	一	一	二
技藝	一	一	二	一	一	一	二
產業	一	一	二	一	一	一	二
隨筆	一	一	二	一	一	一	二
叢書	一	一	二	一	一	一	二
雜誌	一	一	二	一	一	一	二
合計	一四四	四七	一九一	一六・七	一七九	一六	一九五
一日平均	五・六	二・五	八・一	一〇・〇	二五	一・七	二六・七
前年同(増)	一・三	三	六	一・〇	一三	一	一四
月比較(減)	一・三	三	六	一・〇	一三	一	一四

備考  
 本表ノ人員ハ延數ナリ更ニ一日内ニ於テ全一ノ人幾回來ルモ一人トシ本月中合計  
 ナナセハ五百九十八人ニシテ其一日平均ハ三十三人弱トナル  
 日曜日三回分ハ各其前日ノ土曜日中ニ合算ス